

1級大阪会場【シーチング組み立て】傾向と対策

色が付いていない箇所は常に気を付けていただきたい箇所となります。青く印した箇所は今回のデザインで関係ある箇所です。

1級ではシーチング組み立ての完成度の高さを求める。シーチング組み立ての完成度を上げるためにどのようにピンうちをすればよいか研究や工夫をし、身頃、袖のデザイン表現、シルエット表現を確認して試験に望んで頂きたい。また、パタンナーの業務として、しかるべき位置に正確にいせを入れ、くせとりを行い、本物の商品が想像できるものでなくてはならない。

以下の項目は、求めているレベルに達していない又は未完成のため不合格の対象となるので注意する。

- ① 課題のデザインが正しく立体化されていないもの
- ② 構造上のデザイン線の間違え
- ③ パーツの欠落のあるもの
- ④ シーチング組み立てが未完成なもの
- ⑤ 地の目の方向が異なるもの(横地使用)
- ⑥ 着丈・袖丈等の違い
- ⑦ パターンの欠落、縫い代の欠落
- ⑧ 仕様書が未記入

<身頃>	
構成	① 前身頃は3面構成のパネルラインでバストダーツはウエストダーツを利用したマニピュレーション処理を行う。
	② ウエストの仕上がり寸法を決め、前後身頃切り替えのダーツ量、マニピュレーションを行うウエストダーツ量を決める。それぞれのバランスが悪いときれいなシルエットが表現出来ない。
ピン組立て	① マニピュレーションの組み立ては、ウエストダーツをピン打ちし、ポケット口が上下突合せになった状態で裏面から接着芯や接着テープで貼り合わせる。その後、パネルラインを伏せ、ポケットを付ける。その工程で処理をしなければ、ポケット口が開いてしまいシルエットが崩れる原因となる。
	② 切替え線は、なめらかな曲線が描けていないとピン打ちしても思い通りのシルエットにならない。
	③ 切り替え線はくせとりをしてピンを打つことで身頃の滑らかなラインが表現できる。
	④ ピンの間隔や打つ位置もシルエットに大きく影響する。どこにピンを打つべきか、どのくらいの間隔でピン打ちするかよく考えて組み立てる。
縫い代処理	① 前端のカーブは断ち切りにせず、出来上がり線で折り、縫い代を折り込むが、アイロンだけではカーブをうまく折れない場合、ぐし縫いをして縫い代を落ち着かせ、ピンの打ち方や本数でカーブのシルエットが美しく仕上がるように工夫して頂きたい。
	② 裾、袖口も前端同様に出来上がりに折り、縫い代が出てこないようにある程度ピンで止める。裾、袖口が折られていなければ未完成として不合格になるので注意する。
	③ 後ろ中心の始末は、左後ろ身頃を8~10cmほどの幅で作成し接ぎを作るか、左右後ろ中心の出来上がり線を写して接ぎを作らず縫い目を表現するなど、美しい後ろ中心を表現することが望ましい。

＜ボタン・ポケット＞	
バランス	① ボタン位置や間隔のバランスが悪いものがあつた。デザイン画から位置や間隔を確認し、適切な位置に付ける。
縫い代処理	① フラップの周囲に縫い代を取り、出来上がり線に沿ってアイロンを当てながら縫い代を軽く折り上げその後、表からアイロンで折る。またはカーブ部分のみにぐし縫いして折ることで美しいカーブで仕上げることができる。
ピン組立て	① 左胸ポケットは両玉縁にフラップポケットが付いたデザインであるが、フラップの小さいものが見られた。腰ポケットの大きさを考慮して、フラップ幅や付け位置をバランスよく表現して頂きたい。
	② ポケット口はフラップの上側に玉縁が見える構造になっており、玉縁布の表現も必要である。縫製の時の玉縁幅を考えフラップに直接書き込むか、または玉縁を作成しフラップと一緒に身頃につけてもよい。

＜衿・衿付け＞	
仕様	① 衿に芯を貼る、貼らないはどちらでもよいが、芯を貼る方が衿外回りの伸びを防ぎ、衿折れ線が滑らかに返る為、芯を貼るほうが美しく仕上がる。
ピン組立て	① 衿付けは縫い代のあたりが表に出ないように注意し、ピンのすくい量はできるだけ少なくする。
縫い代処理	① 衿外回りの縫い代はピンを打たず、縫い代をしっかりと折り込んで仕上げる方が美しい仕上がりになる。その際、縫い代が重なり、浮きやすくなるので衿先のみピンを打つほうが望ましい。

＜袖・袖付け＞	
ピン組立て	① 肘の形状を表現し、美しい袖を作るには、外袖のくせ取りが必要である。
	② 袖口明き見せの始末の表現は、後ろ袖切り替え線の明き止まりまでピンを打ち明き見せ部分は持ち出しと見返し分量の縫い代を付けてアイロンで折ることが望ましい。
	③ 肩パットの設定が悪い為、安定した袖付けが出来ず見栄えが悪いものが多く見られた。肩パットは前後共にアームホールの縫い代端までしっかりと掛かるように設定する。
	④ 袖付けのピン打ちは、縫い目線の際を袖付け線に沿って平行に止めるが、ピン打ちやいせ配分の不備のために袖のシルエットを崩してしまったものが多かった。ピン打ちでいせの表現ができない場合は、ぐし縫いをして袖山の形状をある程度整えてから付けるなどの工夫が必要である。
	⑤ 袖付けの際、最も重要なことはいせの分量と配分を正確に行った上で、合い印をしっかりと合わせて袖を付けることである。繰り返しの練習は必須である。